



天使大戦TRPG
エンゼルギア2nd SS
～上木中佐の奮闘～

その1

「シュネルギア3機中、2機無傷、1機大破、か」

なんとまあ、まずい戦いをしたとか...というセリフを飲みこむと隣にいた副官の織田ハンナ中尉を見る。視線が合うと心配そうに口を開いた。

「上木中佐、大破した3号機を含め全機回収を完了しました」

輸送機内のモニターに回収完了の表示が出る。

「んじゃ、帰るか」

指揮卓に足を投げ出し、軍帽を顔にかけて目を閉じた。

「了解しました。中佐」

その声を聞いてオレは眠り始めた。

「上木中佐、話がある」

翌日、ドライクロイツ司令のヴィヴリオ大佐に呼ばれて執務室にやってきた。

「昨日は御苦労だった」

「はあ」

「中佐、司令の前です」

小声でハンナ中尉に注意される。あー、はいはい、と聞き流す。

ヴィヴリオ大佐はそんなオレ達の会話を無視して続けた。

「.....単刀直入に訊くが、あれは貴様の指揮の結果か？」

「まあ、そうですが.....」

「貴様の指揮ぶりには定評があったはずだが、犠牲が極端すぎる」

「しかし、3号機は元々白兵戦仕様で犠牲が出ることは折り込み済みのはずです」

「貴様には聞いていない。織田中尉」

厳しくヴィヴリオ大佐が言い放つ。オレに視線を合わせて続ける。

「上木フリッツ中佐、貴様が適切に指揮権を発動させなかったことにより犠牲が出たと主張する者がいる」

「へえ、そうですか」

「中佐！」

気のない返事をしたらまたハンナ中尉に怒られた。首をすくめてやりすごす。

ハンナ中尉が机を叩いた。

「誰ですか?! そんな無責任な主張をする人は!」

「瑞穂基地副司令、キストラー中佐だ」

あのハゲか。デブで尊大な憲兵あがりかオレをひがんでいるのか?まあ、いいや。

「で、軍法会議でも開きますか？」

昼飯を注文するような口調でオレはヴィヴリオ大佐に問いかけた。

忌々しそうにヴィヴリオ大佐が口を開いた。

「これから『査問会』を開くそうだ。すぐに第3会議室まで出頭しろ、だそうだ」

「めんどくせえなあ」

「何を言ってるんですか！中佐！」

ハンナ中尉に怒られたところを見ると口に出してしまったらしい。

「面倒だろうが行ってやれ。無視しても後々まで付きまとわれるからな」

「了解しました。上木中佐、これより査問会に出席します」

「.....御苦労」

「御苦労」のタイミングが遅れたのは多少は気を使ってもらっているのだろうか？

そんな事を考えながら執務室を後にした。



その2

ヴィヴリオ大佐の執務室から出るとオレは第3会議室に向かった。

会議室に入ろうとすると衛兵が立っている。物々しいなあと思いながら通り過ぎようとする
とハンナ中尉が衛兵に止められた。

「上木中佐のみを通すように言われています」

「何ですって!？」

「そんなもんだろ。正規の軍法会議じゃなくて私的なリンチの為の査問会なんだから」

「しかし！」

「まあまあ、中尉。殺されはしないだろうからウチのオフィスで書類整理でもしててよ」
オレはわざと明るくハンナ中尉を小隊オフィスに返した。さて、と。

改めて第3会議室に入った。正面にはキストラー中佐、両サイドにはヤツのシンパか。

「やっと来たか上木中佐」

「『呼ばれて飛び出てジャジャジャジャー』とでも言いませんか？」

キストラー中佐の眉が急上昇した。

「きッ！貴様は査問を受ける身なのだぞ！神妙にしたらどうだ？」

「そーですね！」

某番組の観客のような返事をしてみた。案の定キストラー中佐はプルプルと震え始めた。

「そんな態度を取れるのも今のうちだぞ」

どんなに喰えばそうなるんだ？と思うような腹に口ひげをしたキストラー中佐の前の椅子に
腰を下ろしたオレは足を組もうとするとキストラー中佐の怒号が飛んだ。

「足を組むな！貴様は査問を受ける立場なのだぞ！」

「ハイハイホー」

.....これはどうやら聞こえなかったらしい。

「それでは査問会を開始する」

裁判官のようにキストラー中佐は宣言した。

獲物を前にした猫のようにキストラー中佐は得意になっていた。

「昨日行われた天使化した我龍との戦いにおいて上木中佐のシュネルギア隊第2小隊は
これと戦闘、その後撃滅とあるが相違ないか？」

「はい」

「その戦闘において3号機の損害が甚だしく大きかった。これは何を意味するのかね？」

「3号機が軍務をまっとうしたのではないのですか？」

「そうではない！」

キストラー中佐が叫ぶ。

「3号機が格闘戦を行っている間、他の2機は我龍に攻撃を加えなかったそうじゃないか！」

...あー、確かにそうだなあ。

1号機は「お前の因縁の相手だから手は出さない」とか言っていたし

2号機はホイシュレッケの処理に追われていたからなあ。

「1号機は八坂少尉の救出に、2号機はホイシュレッケの対応をしていたものですから。それに……」

「それに、なんだね？」

キストラー中佐がいらだって促す。

「友軍機が一機も上がってこなかったのも手が足りなかったんですよ」

「！」

あんたは見てるだけだっただろうに、と暗に言っているのに気がついたらしく
会議室の雰囲気が一気に悪くなった。

「……我々が地上で安穩と見ていたとでも言いたいのかね？」

「友軍機が1機も上がらなかった、と事実を述べたまでですがね」

キストラー中佐の問いに殊更（ことさら）丁寧に答える。

「では、その件は一応置くとして次の件にうつる」

……この野郎、逃げやがったな。

「我龍と戦う際にキミは小隊の全シュネルギアに言ったそうだな。

『いつも通りやれ』と」

「それが何か？」

「これは小隊長として指揮権を放棄した発言だ！キミがここでの確な指示を与えていたら3号機は大破することはなかったのではないのかね！」

キストラー中佐の分かり安いこけ脅しに乗る程の義理はないので、盛大なため息をついてからゆっくりと俺は口を開いた。

「その時点で2号機から各機の行動指針は出ていました。それが私の指揮内容と同じだったので先の発言になったのです。……大切な事だから2度言ったほうがよかったですか？」

小学生じゃあるまいし、というセリフを付け加えるのはやめておいたが、オレの発言の最中でもキストラー中佐は怒りで拳をプルプルと震わせていた。

「貴官は小隊長という立場にありながら自らの部下に指示も出さないのかね！」

「少ないだけで指示は出してますよ。あまり多く言っても混乱するだけですからね」

「ぐ!」とも「ぶ!」ともつかない声を上げてキストラー中佐は押し黙った。

不意に入口のドアが開いた。見ると羽村軍医がそこにいた。まあ、アイツなら衛兵をすり抜けてここに来ることぐらいはお手のものだろう。オレはそんな風に思った。

「会議中失礼します。上木中佐に報告があるのですが……」

羽村を睨みつけたキストラー中佐は尊大に言い放った。

「後にしたまえ。今、査問中だ」

ひとつ思いついてオレは言った。

「トイレ休憩がほしいのですが。ここでデカイのを産み落としてもいいのなら遠慮なく……」ベルトに手をかけた時点でキストラー中佐が狂ったように「休憩だ!」を連発して15分の休憩となった。

「で、報告って何よ？」

羽村と休憩室に入り、紙コップのお茶を啜りながらオレは羽村を見た。

「八坂少尉の事だが……何があった？言葉が増えたというか、感情が豊かになったんだが」

「ギャルゲー的に言うならフラグが立ったんだろ」

オレじゃなくて1号機パイロットとな、と付け加えてオレは緑茶を啜る。

「それもそうだが……天使化、しかけたんじゃないのか？」

こいつも啜え煙草で核心を突く。毎度おなじみの手だ。

「たとえそうだとした場合、天使にはならなかった、それで十分じゃないか？」

灰皿に灰を落としながら羽村は続けた。

「だがね、上木中佐、次は天使化するかもしれんし、その可能性も高いぜ？」

「元が天使だから、だろう？」

今までの事から考えてその結論を出していた。言葉にしたのは初めてだったが。

「知ってたのか……」

ため息交じりで羽村がつぶやく。

「そうだとした場合、彼女を……八坂少尉を1号機から下ろすほど、オレ達や有り余る兵力を持ってはいなんでね」

「確かにそうだな」

「で、話はそれだけかい、軍医どの？」

「ああ、3号機ペアの外傷は寝ていれば治るし、2号機ペアは問題なしだ」

そう言うと羽村はタバコを消して立ちあがった。

「休憩の差し入れ、ありがとさん」

羽村の背中にオレは声をかけて緑茶を飲み干した。

査問会はまだ、終わっていない。

その4

会議室に戻るとキストナー中佐はメモを片手にニヤついていた。

オレがイスに座るとキストナー中佐は査問会の再開を宣言した。またもや勝ち誇った顔になっていた。

「上木中佐、たった今、新事実が判明した！」

「おや、ご自分の隠し子でも見つかりました？」

「そんな事でない！」

「では、どんな事でしょうか？」

「.....1号機は3号機に『お前の因縁の相手だから俺は手を出さない』と言っていたそうじゃないか！」

これは明らかに1号機パイロットによる戦闘の私戦化だ！」

.....バレたか。

誰もいなかったら天を仰ぎたかったが、それをしてしまうと認めたことになる。

今聞いたように感心したように頷いてみせた。

.....さて、どうしようか。

これを認めてしまうと1号機パイロットが査問会に引っ張られる。

アイツの性格からして、ここにいる全員をフルボッコにして営倉行きは確定だ。

それは後々まで面倒な事になる。.....オレで止めないとな。

オレは口を開いた。

「.....最終的に我龍の機能を停止させたのは1号機でした。同一エンゲージ内で同一武器を扱う2機が戦った場合、誤って刺す可能性があります。今回の敵はシュネルギアと同じ形態の我龍でした。その可能性はとても高い状態でした。

それで、3号機を前衛に、2号機を後方支援の攻撃に展開させました」

キストナー中佐は上唇を舐めた。

「1号機が私戦を行った事を認めるんだな？」

「いいえ、1号機は私戦を行っていません」

本当は私戦を煽った、が正しいのだが、それをここで言っていられぬ口実を作らせる必要はない。

(隊長はつらいよ、か)

「では、貴官はあくまで3号機の大破は避けられなかった、と主張するのだな？」

.....いや、避けられたと思う。我龍の正確な能力を各機に伝えていれば、もしくは3号機と1号機が連携を取って戦う事はできない事ではなかった。

しかし、それが気が付いた時にはすでに3号機は大破寸前に傷ついていた。

「はい、結果から見たら自分の戦闘指揮がまだまだ甘かったようです」

「ようやっと自分の非を認めたか」

小躍りしそうなくらいにキストナー中佐の声はうわずっていた。

「それには同じ状況で同じ戦力で貴官がより完成度の高い指揮ができるとの証明が必要です」

キストナー中佐が「ぐっ！」と声を漏らし、唇をかみしめていた。

「誰だって攻略本があればゲームはクリアできるものです」

「ゲームと実戦は違う！」

「では、第2小隊の指揮が貴官に取れますか？」

口を開いたままキストナー中佐は絶句した。全員の評価に「だが、性格に難あり」が漏れなく付く連中の指揮を取るためにオレが呼ばれた経緯をここにいる全員が知っていた。

オレは初めてヴィヴリオ大佐に会った時を思い出していた。

体に合わない大きな軍帽に子供並みの身長。何故子供が大佐に？との疑問は
ドライクロイツの司令官の肩書を知って納得した。

とはいえ、ドライクロイツ自体、決戦兵器の開発部ぐらいにしか思ってなかった。

「ウエキ准将だな？」

「いえ、今は上木”中佐”であります。ヴィヴリオ大佐どの」

彼女の執務室にオレはいた。椅子を勧められて机を挟んで彼女に向き合う。

（自分の執務室だつーのに軍帽も取らないんだな）

「……上木中佐、貴様の軍歴を調べさせてもらった」

彼女は手元の書類に視線を落とした。

「第2艦隊副参謀長時に孤立した硫黄島の救出を実行。

軍民合わせて1021人を同島から脱出させる事に成功。

しかしこれが無断で艦隊を出動させたという事で不名誉除隊になるはずだった。だが——」

そこで彼女は言葉を切り、オレを一瞥した。

「——だが、島民全員、および作戦参加の兵から嘆願書が上層部に提出されて
2階級降格の上、現在は戦史編纂室付か」

「はあ、まあ。皆様のおかげをもちまして」

嫌味ではなく、事実なので肯定しておいた。彼女が口を開いた。

「なぜ、無断で艦隊を動かした？貴様なら作戦案を出して
正規の手続きを踏めば済んだ事ではないのか？」

「当時の第2艦隊司令部の大勢は『たかだが1000人程度の孤島に
艦隊を出動させるべきではない』という事でしたので小官の独断で行いました」

ここでオレはいたずら心を出してみた。

「と、これが表向きの理由です」

俺は笑ってみせた。彼女は一瞬大きく目を見開いたが数秒の間の後でオレを促した。

「……では本意を聞こうか」

「元カノとその子供が硫黄島にいたんですよ。見殺しには忍びなかったので、やっちゃいました
」

てへっ、と笑って見せたが、彼女は表情を変えずに意外な言葉を投げてきた。

「上木中佐、貴官は十分救出可能な算段ができていたのではないのか？」

そうでなければ、現地司令の栗林大佐との連携は取れないだろう。

しかも救出部隊は全艦潜水艦だ。

なおさら第2艦隊司令の命令書が必要ではないのか？」

的確な彼女の質問にオレは時間を稼ぐために天井を見上げた。

(ただのこども大佐ではないようだな)

ややあって彼女に視線を戻した。

「えー、自分も部下を無駄死にさせるわけにはいきませんし、それに命令書は簡単に作ることができますので」

「そうか。ではそろそろ本題に入る。今回、ドライクロイツに第2小隊を新設する。君には小隊長になってシュネルギア3機を率いてもらう」

これがパイロットだ、と渡された書類は子供達だらけだった。

渡されたファイルのどれを見ても成人はいなかった。

さすがにオレは眉を寄せた。どこのクラス名簿ですか？と問いかけて、やめた。

「.....私にボーイ・スカウトをやれと？」

そのままヴィヴリオ大佐に顔を向けた。彼女はオレの視線まっすぐ見返した。

「違う。彼らを率いて勝て。そして誰も死なせるな」

「ちょ、ちょちょ、待って下さいよ、大佐どの」

さすがにオレは頭を抱えた。勝つのは計算が立つかもしれない。

でも誰も死なせないなんて事はそれこそ神様でないと不可能だ。

「両方はさすがに無理ですよ」

それがオレの結論だった。しかし、彼女はオレから視線を外さなかった。

「貴官ならできる。だからこそ瑞穂基地に呼んだのだ。それにだ」

彼女は立ち上がって窓から空を見上げた。空には一筋の飛行機雲が線を引きいていた。

「.....それにだ、このまま戦い方を知らない子供たちが最前線に出たらどうなる？

貴官の意見を言ってみろ」

オレの答えはひとつだった。

「初陣で戦死しますね」

ヴィヴリオ大佐はオレに向き直った。

「それを止められるのは貴官だけだ。頼む、上木中佐」

彼女は軍帽を取り、頭を下げた。さらに言葉が続けた。

「頼む上木中佐。これ以上、子供達を死なせたくない」

彼女はそう言ったまま、頭を上げなかった。

「.....大佐どの、頭を上げて下さい」

オレはヴィヴリオ大佐の頭を上げさせた。数秒考えたがオレは結論を出した。

「微力を尽くします」

「やってくれるか」

ヴィヴリオ大佐が安堵したような顔をしたが、それもすぐに消えた。

軍帽を被り直すところ言った。

「書式は揃っている。明日には赴任してくれ」

オレは椅子から滑り落ちそうになったが、態勢を立て直してオレはため息をついた。

「明日ですか.....時に大佐どの、ひとつお願いがあります」

「言ってみろ」

「優秀な若手をひとり、副官としてほしいのですが」

「いいだろう。すぐに手配する」

よりによってあのハンナ中尉がやってくるとは思ってもよらなかった。

「...中佐！聞いているのかね！？上木中佐！」

キストナー中佐の苛立った声でオレは会議室に意識を戻した。

「『自分でなければ第2小隊を指揮できない』などと思い上がりにも程がある！
瑞穂基地副司令として貴官に謹慎を命じる！」

.....へえー。あいつらの指揮をこいつらが取るのか。見物だな。

オレは不敵に笑ってみせた。

「では第2小隊の指揮はどなたが取るのですか？」

「説明の必要はない！貴様の身柄は拘束する！」

キストナー中佐がまた怒鳴った。それに合わせて入口にいた兵士がオレに近づいてきた。

.....やれやれ。どうしようかと思ったところで兵士がオレを両脇を抱えた。

「大丈夫さ、ひとりで歩ける。逃げやしないよ」

片手を上げて兵士から腕を振り解く。結論がコレだとは分かっているも

多少は抵抗できたな、と考えて軍帽を被って入口に向かおうとした。

その入口が開き、一人の軍服の女性が立っていた。

「そこまでだ。キストナー中佐」

肩まである金色の髪をかき上げてややつり上がった瞳がキストナー中佐を睨みつけていた。

「姉さん.....」

「なっ！？」

オレの一言にキストナー中佐は棒立ちになった。

「方面司令部参謀長のフォン・ウエキ少将だ」

カメラマンが写真にしたいくなるような見事な敬礼してからキストナー中佐の前に姉さんは立つ。

オレを除く全員が慌てて敬礼をした。

「さて、キストナー中佐。貴官はシュネルギア第2小隊長たる上木中佐を拘束する意味は何だ？
」

姉さんが凜とした声を放つと、キストナー中佐から明らかに焦りの声が漏れてきた。

「軍紀を乱した上木中佐に対しまして基地副司令として軍紀を正す必要が.....」

「ただの貴官の私怨だろう。違うか？」

「うっ.....」

「肯定したな。では軍紀では私的制裁は一切禁じているのは承知しているな」

「.....は、はい」

「では、上木中佐の謹慎と拘禁は現時刻もって無効とする」

厳かに姉さんは言い放った。

「しかし.....」

キストナー中佐の不服の声に姉さんは形のよい眉を吊り上げた。

「ならば、私的制裁の現行犯で貴官を軍法会議に立件する。弁護人の人選を今すぐに行え！」

姉さんの気迫に押されてキストナー中佐は平身低頭した。

「ひえっ！！申し訳ございません！それだけは……軍法会議だけはお許しを！」
……そりゃ出世に響くものなあ。軍法会議は。のんびりとオレは考えると姉さんは宣言した。

「現時刻をもって査問会は解散する！」
やっとオレは茶番から解放されることになった。



(エピローグ)

「上木中佐！」

会議室から出るとハンナ中尉が待っていた。

やあ、と声を掛けて言葉が続ける。

「キミかい？ウエキ少将を呼んだのは？」

「少将から厳命されてましたので。『あのバカが本気でサボろうとしたら連絡せよ』と」

「やれやれ...硫黄島の時に勤勉は使い果たしたんだんだがなあ」

大きく両腕を伸ばす。姉さんが会議室から出てきた。

「フリッツ、せっかく来たんだ。茶の一つも出すのが礼儀だろう」

「はい。では、私の執務室に。.....ご迷惑をお掛けしました」

素直に詫びておく。後々まで言われそうだと思いながら頭を下げた。

「礼は私よりもハンナ中尉に言うことだな。教えてくれたのは彼女なんだからな。

.....まったく、お前には過ぎた副官だな」

その言葉でハンナ中尉に向き直る。

「ありがとう、中尉。今回も助かった」

「いいえ、副官としての職務を遂行したまでです。でも.....

お役に立てて、とても嬉しいです」

ハンナ中尉は敬礼をした。思わずオレも敬礼する。

「おい、茶はまだか」

姉さんがオレを急かした。

オレの執務室で姉さんとオレは向かい合って紅茶を飲んでいた。

「フン、隊長職は務まっているようだな」

整理された部屋を見渡して姉さんが毒づく。

「部下が優秀ですから」

オレは紅茶に口をつけた。

「本来、この方面司令部参謀長の役職と少将の階級章はお前のモノだ。

わたしはお前の代わりにすぎん」

「何をおっしゃいますか。上木家の長女様ともあろう方が」

姉さんはオレを睨みつけながら紅茶を口にしました。

「本来の手順を踏めば通ったのにわざと無断で艦隊を動かした”お前が言うな”」

誰のせいで苦勞してると思ってる、と姉さんは呟いた。

「...ところで、フリッツ、お前が帝都奪還するというのは事実か」

「はい」

「なら、勝算はあるのだな」

「ええ、まあ」

「なんだ？」

「問題はその後です。帝都を解放した後、どうなるのか」

「反転攻勢に移る。その為の帝都奪還作戦だ」

「ですよー」

「その性格、何とかならんのか」

姉さんは呆れたように溜息をついた。やがて立ち上がった。

「そろそろ司令部に帰る」

「ありがとうございました。色々」

「この貸しはきっちり回収するからな」

敬礼ひとつして姉さんはドアに向かう。ドアが開いた瞬間に姉さんは振り返った。

「フリッツ、お前にしてはやけに急ぐな。何故だ」

やっぱり感づかれていたか。

「なるべく早く子供達を家に帰したい。それだけです」

「そうだな。子供を戦場に出して勝った戦（いくさ）はないからな

.....フリッツ」

「はい？」

「死ぬなよ」

「分かってますって」

笑顔で姉さんを送りだした。

帝都奪還作戦の開始が近づいていた。

(終)